

第四回 エッセイ賞 作品集

# 私と箸

- |     |             |       |
|-----|-------------|-------|
| 大賞  | 「魔法の夫婦箸」    | 植田旭彦  |
| 優秀賞 | 「温もりの架け橋」   | 片山ひとみ |
| 優秀賞 | 「彼が一番輝いたとき」 | 高田外亀雄 |
| 特別賞 | 「箸の前世」      | 幾原正智  |
| 特別賞 | 「お守り」       | 大西 賢  |
| 特別賞 | 「想い出の懸け箸」   | 飛塚 優  |
| 特別賞 | 「父の箸」       | 菅原真知子 |



一般社団法人

國際箸學會®

INTERNATIONAL INSTITUTE OF HASHI

【受賞作品】

※作品中、数字は漢数字に書き改めました。

大賞 魔法の夫婦箸

植田 旭彦

食器棚を整理していた家内が言った。

「あなた、ほら夫婦箸よ。あの日、感動したわ。ふしぎな箸よ。でもさ、わたしが買っていない夫婦箸が、あのとき、どうして家にあつたのかしら」と、しつこく言い寄ってきた。心ならずも、苦々しい思い出話をするはめになってしまった。

私が中学生のとき、京都・奈良の修学旅行のみやげに夫婦箸を買ってきた。

「箸なんて、たんとあらあによ」

「せっかく、買ってもらつたけん」

父の言葉に母は私の顔をうかがいながら、父をなだめすかした。だが、頑固一徹な明治男は冷ややかな顔をしてコップ酒をあおつた。「勝手にしろよ！」と捨て台詞ぜりふをはいて、私は外に飛びでた。夜空にまたたく星々がぼやけて見えた。

そして歳月が流れ、私が三十で結婚するとき、父がぶつきらぼうに言った。

「おい、夫婦箸を持っていけ」

「だって、俺がふたりのために買ったじゃ」

「仲良くな、それが一番の親孝行だべ」

そのときは腑に落ちなかつたが、新居の食器棚に夫婦箸を家内に話すことなくしまつて、すっかり忘れていた。父は、箸を使うのはもつたいたないと言つて大切に保管していた、と後日、母から聞かされた。

父が大病を患い入院したのは齢七十五で私が五十路にさしかかつた頃だった。食は細くなり胃ろうをすすめられた。だが、父は頑なに嫌がつた。体力が弱まつたせいか、ついに観念し胃ろうを承諾した。手術の二日前、最後の晚餐だった。

私は懐に秘策をひっそり家内と病院にいった。ベットに座つた父の前に普通食がおかれていた。口にできなかりうに、病院の

心づかいと思った。父は箸を持つでもなく、こそげた頬をふるわせた。

私は上着のポケットから夫婦箸をとりだした。

「父さん、覚えてるかなあ、この箸だけど」

「おおつ、忘れんもんか」

父の顔に血が流れ、喉仏がふるえた。父は箸を手にし少し考え込んだが、鱈の煮付けに箸をつけ口に運んだ。食べたあと、そばにいた看護師が病室を素っ飛びでて、主治医を引っ張ってきた。

「おおつ、まさか、食ったか、箸に御株を奪われたわ。手術はやめだ」

医者は坊主頭に手をやり肩をすぼめた。

「先生、魔法の夫婦箸でな」

父がにたりとした。私達も亡き父の歳に近づいてきた。父が口にした箸は二十年、食器棚で眠っていた。

「夫婦箸を使いましょうか」

家内がぼつりと言った。

### 【講評】

○整理した食器棚からある日、出てきた夫婦箸が親子の絆や、箸の持つ不思議な力を感じさせる秀逸なエッセイ。短い文章の中で、起承転結がみごとに描き出されており、ぶつきらぼうな父親が実に愛情深い人であったことに感激した。締めくくりで、妻が「夫婦箸を使いましょうか」という言葉が活きている。文句なしの大賞受賞作である。

○苦々しい思い出話が、胃妻から父を救う物語に展開して、驚きながら興味深く読むとともに深く感動しました。

○頑固な父が胃ろう手術を前に、最後の食事と覚悟した時に使ったのは息子からの箸。食事をする事が出来て医者は手術をやめたという。頑固もの同士の父と子の心の動きに惹かれた。

○箸の記憶が意欲を生むことを知らされた。

「この生徒はユニークな持ち方をするな」

親子そば打ち体験会を開催した時だった。

招いたそば屋の白髪混じりの店主は、会食が始まると、親子のテーブルを笑顔で回っていたが、ふと、腕組みをして唸り、続けた。「せっかく自分らで粉から打った旨いそばも、そんな箸使いじゃ、虚しい気になるなあ」

主催したのは、当時、娘が通うこの中学校のPTA会長をしていた私。なんだか自分が非難されたようで、苦しくなった。「ほんなら、おじさん、教えてん」

男子生徒が手を挙げた。その頃、学校は荒れており、彼も細眉に制服をダブダブズボンにして腰履き、カッターシャツも出していた。

店主は、「任せとけ」とばかりに、側に寄った。彼の手を取り、動かそうとしている。

「もう、わからん。わし、成績悪いんじや」

傍らの母親も、「私もできんわ」と赤面した。

店主は、思いついたように、「よっしゃ」と呟き、荷物から輪ゴムを大量に出してきた。

「これをな、薬指の第一関節に巻くんじや」

親子五十組ほどが、背中を丸めて指に通す。

「下箸を通し、上箸だけ鉛筆持ちで動かす」

しわがれた声の店主の説明を授業より真剣に聞く子どもたち。隣席の親は、ちゃんと通しているか手伝い、互いの手元を見つめ合う。

「わあ、動かん。箸使うの、難しいで」

「私、何十年も間違えとった。恥ずかしい」

あちこちで驚きやため息、笑いが起きる。

私が企画した目的は、親子の触れ合いを持つことだった。親と子の心の距離が空くほど、子どもがやんちゃなシグナルを出す気がしていた。せめて、手作り作業と食卓を共にすることで、接近のきっかけづくりをしたかった。

「おかんに手を握られたの何年ぶりか」

「まだまだ子どもに関わらんといいけん」

顔を赤らめ嬉しそうな男子、娘に抱きつく母親。使い方を学ぶ親子の背中が寄り添い重なり情愛が会場を包んでゆく。その姿に、箸は大切な人との温かな架け橋を作ると知った。

「将来、彼、彼女とデートする時、恥ずかしくないように、家でもよく練習してな」

店主が、道具を積み込み手を振りながらワゴン車で去っていく。みんなもお礼を叫んだ。

「ええ勉強やったあ。そばもお箸も忘れん」

反抗期の娘が照れながら近づいてきた。最近、ろくろく口も聞かなかったのに。

「今晚お父さんにも使い方教えてあげよう」

娘の提案に涙がこみ上げ、何度も頷いた。

### 【講評】

○そば屋の店主の素晴らしい機転で、そば打ち体験会が同時に箸の持ち方教室にもなる中で、親子の触れ合いが生まれる心温まるエッセイ。当学会でも箸教室を開催しているが、まさに目指すべき理想である。男の子が「おかんに手を握られたのは何年ぶりか」という一言は親子の肌の触れ合いの大切さを思い出させてくれた。

○こんな箸教室ができれば素晴らしい。

○親子そば打ち体験会が箸の持ち方指導に発展して（輪ゴムを使うのがユニーク）、それが親子の温もりの架け橋となった展開に感動しました。

筋萎縮症の小学四年のS君の担任をした時、彼は車いすで指は動かしたが、手は少ししか上がらなかった。給食はスプーンだった。食事は箸だ！の考えに固まっていた僕は、

「S君、給食は箸を使おう」

と提案した。しかし、直径行型で思いついたら直ぐ実行する僕は、彼の意向を聞かなかった。

さつそく、厚紙で一辺が一センチの立方体を作り、それを箸で挟む練習をした。まず中指で下の箸を支え、上の箸を人差し指と親指でつかむ。うまくつかんだぞ、その調子だと励ます。次に人差し指と親指により力を入れて、厚紙の箱を挟めと指示した。あつ、落ちたぞ、もつと力を入れろと、また挑戦させる。挟む力が弱いので、なかなか挟めなかった。

給食ではご飯粒一つを挟むというより箸にくつつけて、少し持ち上げ口を近づけて食べた。やったぞ、万歳と叫ぶと彼もにこつとした。その後、彼のいたずら心で、コロケを四等分しその一切れに箸を突き刺して食べた。彼は

『ヤッター』

と声を上げた。よほど嬉しかったのだろう。

ところが、この箸の訓練と食べ方が病気の子には適切でない。訓練ではなく苦行だと批判されたのだ。確かに筋肉の病気の子にする訓練ではない。刺すなどは行儀も悪い。僕は批判されて、はつと気づいたのであった。

その後、彼は病院付設の中・高養護学校へ進学し、卒業後は放送大学で学んだ。その間、僕は彼に非常識なことをしたと、負い目を抱き、悪いことをしたと自分を責め続けた。

彼の病状は悪化し、人工呼吸器を付けて指さえ動かなくなつた。それでも彼が放送大学で学び続けていると知った時、僕はなぜか謝りに行く決心がついたのである。

病室には祖母がいた。箸の件を素直に謝ると、祖母はとんでもないと否定し、逆に箸の訓練をしてもらってお礼を言うという。えつと、息を飲んだ。祖母によれば箸で挟む訓練を家でもして、家族中が箸挟みに熱中したそうである。リンゴ、メロン等を小

さく切って挟み、彼はどんどん難しくしたらしい。それまで家族は、彼に新たな挑戦を避けさせ、腫れ物に触るようにしていた。祖母は

「それで箸挟みは新鮮だったのでしょうか」

と彼を見た。さらに

「Sちゃん、ガンバレ、力を出せって楽しかったね」

彼は頬をピクツとさせた。

その瞬間、彼が箸挟みに熱中したのを確信した。僕はその切っ掛けをつくったと思うと少しだけ気が楽になったのであった。

#### 【講評】

○教える育む、本当の意味の教育とは何かを考えさせてくれるエッセイ。筋萎縮症を患っている小学生に箸の持ち方を指導するとは批判される面があることも確かだが、重要なことは本人がどう受け止めるかである。そのとき、教える側に愛情がなければ本人は決して前向きに受け止めることはない。後年、作者は謝罪に行って事実を知るわけだが、その結末は読者をホッとさせる。○箸で食事をするのが出来たS君の笑顔は心からの喜びだったと思う。箸を使わせることを誰に批判されたかは記されていないが、身障者への接し方について考えさせられる一文だ。

私が五十二才の時、父が八十二才で亡くなった。遺品の中に剣道二段だった父の木刀が二本あり、一本は弟が持ち帰った。

木刀振る趣味なかった私は、父を身近に感じていたくって、木刀を三分の一横に切断して、常に使う箸を作ることにした。大体、檜の箸なんて世の中に存在するのかわからなかったが削り始めると、檜は木へんに堅いと書くだけあって、堅いこと堅いこと、ヒーヒー言いながら数時間かけて、やけに先端がとんがった箸を作り、食事の度に、その箸を使って飯を食べていた。

二、三年に一度は訪ねていた福島県の友人から、又遊びに来いの誘いがあり、行くと、とある山への登山を提案された。

さて出発すると、大して高い山でもないのに、人生で初めて自然の中で熊に出くわしてしまった。人生不幸な時は不幸が続くものである。前年、父を亡くし、写真の本業の仕事も少なくなり、胆石の持病が悪化して、医者からは手術を言われていた。その時に熊である。

木の棒を拾って、向かって来たら応戦しよう思ったが、山の中、木だらけのくせに、そんな時に限って、木の棒が落ちてくるわけもなく、あせついていると、「あ！」っと思いつき、自分のカバンの外ポケットの中から例の箸を二本とも取り出した。友人は「目を熊からはみみずみみず、うしろに下がれ、下がれ！」

と、私に言ったが、私は色んな不幸が重なって、多少ヤケクソになっていたのであろう。箸を右手に、小走りに熊に向かっていった。逃げるかと思ったら、熊もこつちに走って来た。

「何やってんだ！」

という友人の叫び声を背に、私と熊はとつ組み合いになった。カバンを左手に熊に押し合て、ガードして、右手に持った箸で十五回くらい熊の体めがけて突きまくった。

さすがに効いたのだろう。熊は急に攻撃をやめ、踵を返して小走りに逃げて行った。

友人が蒼い顔で、すまなさそうにやって来た。私はその時ある事を思った。宮本武蔵が佐々木小次郎と対決する前に、舟をこぐ櫂を削って、長い木刀を作った様に、私は父の木刀を削って箸を作り、その箸のおかげでむかってくる熊を撃退し、命拾いを



したのである。その事を友人に話すと、何の手助けもしなかつたくせに大笑いした。

金銭的には、ほとんど財産を残してくれなかつた父だが、箸にも棒にもかかるシャレたものを残して命を救ってくれた。思えば、生きてた時は、ずいぶんシャレた男の父であつたのだ。その点だけは受け継ぎたい。

#### 【講評】

○「本当なのか！」と驚かされるユニークなエッセイ。父が使っていた堅い櫛製の木刀で作った箸を遺品代わりに愛用していた作者が、その箸で熊を撃退するという奇想天外な話だ。父親は金銭的な財産は残さなかつたが、息子の命を守ってくれたのだろう。○櫛の箸でクマを撃退したという特異な体験描写は最後まで印象に残った。しかしその箸につながる父の思い出や当時の自分の気持ちなどが整理されていないために表現が散漫になっているのが残念。

高校三年の夏休みに、自転車で東京から鹿児島まで行くという冒険に出た。両親はとても心配していたが、若い私はこれから出会う人たちや出会う景色にばかり思いを馳せ、半ば家出同然で旅立った。

東京の自宅を出て二週間ほどしたある日、私は岡山県で親切な人に出会った。

「うちに泊まっていきなさい」

と言ってくれたおじさんがいたのだ。私はおじさんの好意に甘えることにした。おじさんの自宅に行くと、すでに連絡を受けていたおばさんが、すぎやきを作って待っていてくれた。

「キミ、自分専用の箸は持ち歩いているの？」

食事前、そう訊かれて、

「持っていません」

と答えた。なにしろ、ひどい貧乏旅行だったので、箸を使う機会がほとんどなかったのだ。ビル清掃のアルバイト代を資金にしていたのだが、予算が少なかつたため、毎日パンの耳でしのいでいた。だから、箸を使う機会などほとんどなかったのだ。

事情を聞くと、おじさんは一膳の箸を、

「これを饞別代わりにあげる」

と差し出してくれた。そして、おじさんは言った。

「自転車旅行は体力を使う旅だ。パンの耳などではなく、きちんと箸を使って食事をしないとダメだ。きちんと食べてきちんと走り、そしてきちんと家に帰る。今のキミの仕事は鹿児島まで到達することではなく、元気な顔で両親の元へ帰ることなんだ」

よくしたもので、それ以降、箸を使って食事をするようになると、体力もつき、それまで押していた坂も自転車で登れるようになった。旅館に泊まらずに野宿をし、その代わりにきちんと食事を摂ることで、結果的に体調が改善されたのだ。

おじさんが饞別代わりしてくれた箸は、今でも使っている。

今でもあの箸を使うと、おじさんの言葉と当時の両親の心配を思い出す。

私にとってあの箸は、無事に家まで帰ることができた、お守りのような存在なのだ。

【講評】

○旅先で頂いた箸に込められた願いを真摯に受け止め、一人自転車を走らせる一八歳の青年の姿が目には浮かぶ。箸は心をつなぐ、命をつなぐものという思いを新たにしたい。その箸を四六歳の今も使っているというが、その箸を見せてもらいたいものだ。

○自転車旅行する若者にお節介で一宿一飯と箸を提供する親切なおじさんの存在がうれしい。こんなお節介はいつまでも残っていてほしい。後年にこのおじさんと再会するなどさらに展開があれば、素晴らしいエッセイになった。

特別賞 「想い出の懸け箸」

飛塚 優

昨年の大晦日に帰省した息子たちと大型のテーブルを移動した。いつもは妻と二人だが正月には多人数が集うからだ。移動を楽にするため引き出しを総て取り外したところ、その中のひとつに箸が整然と収納されていた。

次男が何かに気づいてテーブルの上で中身を広げだした。まず折り紙の中に入った塗箸や柳箸などが数セットずつ。次には高級な割り箸や旅先で買った民芸品の箸が多種類。箸置きも材質を問わずに続々とでてきた。

「あつた！これだ。懐かしい…」

次男は小さなプラスチックの箸箱を見つけて短い箸を取り出した。箸も同じくプラスチック製である。これは彼が幼稚園児の時に、お弁当箱と対で使っていたものだ。

「うわっ、短かつ！」

と彼が笑う。箸は成人した彼の掌にホトンド隠れていた。長男も布製の箸入れから自分の箸を見つけ出して撫でまわしている。木箸の先端部の噛み跡や握り部分の汚れなどにも、彼なりの思い出が詰まっているのであろう。

二人とも我が家を巣立っていくまで、三〜四回の箸替えの時期があつた。それ等の箸は全部が紙箱の中に並べてあつた。次々に箸を取り出しては、思い出に興奮する二人を見ているうちに、私は妻と私の「替え箸」をも見出した。新婚当時のペアの漆塗りを経て、晩年の檜の箸までが並べてあつた。

妻は息子の嫁たちと正月料理の買い出しに出かけている。我が家の男どもが、彼女の几帳面な気配りに感動して騒いでいることは知る由もない。

引き出しの一番奥底の方から、金銀結び切りの紐を回した分厚く古びた和紙が出てきた。中身は二本の枯れた木の枝で、太さも長さも不揃いであつた。

「なんだ？これ…」

息子たちは不思議があつたが、私はそれを手に取った時に息が止まりそうになつた。

結婚前のことだが、私と妻の初デートは里山でのハイキングであった。お昼時になり妻は持参した手作りのお弁当を広げてくれた。ところが箸がない。彼女は思いも寄らない失態に意気消沈した。山男の私は自慢の万能ナイフで木の枝を削り箸を作った。切り取った枝は「大葉の黒文字」であった。柔らかにしなる箸は使い勝手が悪かったが、妻は「爽やかな香」を気に入りに記念に欲しいと言ったのだ。

あの日から五十年近くが過ぎ、枯れ果てて脆くなった枝から香は消え去っていた。しかし妻の「思い出」と「築いてきた年月」を挟み込んでいる枝箸は、私には目が潤むほどにまぶしく輝いて見えた…。

#### 【講評】

○子供達の小さい頃の箸まで几帳面に整理保管していた妻であり母親の愛情に心打たれる。作者が結婚前、ハイキングに出掛けたとき、箸を忘れてしまった妻がしょげている中、作者が木の枝で即席に作った箸が丁寧な和紙に包まれて保管されていたことに作者も読者も感激する。ただ、妻とのやりとりなどが締めくくりにあると、もつといいエッセイになった。

○大晦日のひと時の情景がよみがえる。

特別賞 「父の箸」

菅原真知子

木枝をポキッと折る。

プンと香る懐かしい匂い。

それはふるさとの山の情景につながり、父の笑顔が重なり、あの日の箸の幻影が手の中にふわりと落ちてくる。

七、八歳の頃だったか、休日父について山に出かけた。小さな村で両親は農業をしていた。風呂や、当時まだしっかりと存在感のあつたかまどに使う薪や木切れを調達するのだ。

「ほうれ、見てみ、ええ天気じゃのう」

見上げた上空には、まさに青という青を集めたような秋空がいつぱいに広がっていた。

母は弁当を持たせてくれた。

子連れのせいか日焼けした父の表情もいつになくやわらかい。仕事半分、遊び半分の気楽さが伝わってきた。秋の陽ざしを受け、平らな場所を見つけると早々と父は「弁当にするか」と笑った。

「あ、箸がない！」

「ありやま、しょうがないのう、箸ならなんぼでもあるで」

山の中だ。たしかに周りは木、木。原料は豊富というわけだ。

父は適当な木枝を折ると、持ってきた鎌を器用に使った。ちよいちよいと節を削った先細の箸があつという間にできあがった。長い箸と短い箸、それぞれにほどよく手におさまる二膳の箸。

弁当を口に運ぶたび木の匂いが鼻をかすめた。

五十数年を経て、山に接することも新鮮な木の匂いを嗅ぐこともそうない。けれど今でも思い出せる。木の匂いとそれにつながる秋晴れのあの日、父の手から作り出された素朴な箸の感触。ふとした折に、あの時の父の年齢をとうに超えた私の手にそつと蘇る。

【講評】

○情景描写や方言を巧みに組み込みながら、シンプルなテーマに深みをもたらしている。父との懐かしく心温まる思い出が読む人にすんなり伝わる、素直ないい文章である。

○さわやかな風景の描写が心地よい。

○小さい頃に父親が枝で作った箸と、その木の匂いが遠い日の父の愛情を感じさせてくれるエッセイ。その思い出に連なつて、別の場面が展開すると、より優れたエッセイになった。

一般社団法人 国際箸学会

二〇一九年四月一日 発行

郵便番号 三三三二一〇〇三三三

住所 埼玉県川口市並木元町七一二五

電話 〇四八―二五〇―四一八五

本書の全部または一部の複写・複製・転記載および磁気または  
光媒体への記載等を禁ずる。